

第7回日本MISt研究会報告書

2016年2月20日（土）、21日（日）の両日、仙台市にて第7回日本MISt研究会を開催いたしました。今回は、第6回東北MISt研究会との合同開催となったために地方開催ではありましたが、約130名の先生方にご参加を頂き、無事に終了致しましたのでご報告させていただきます。

昨年1月に日本MISt研究会の代表世話人が佐藤公治先生から石井賢先生に変わられましたことから、新体制で向かえる実質的な第1回目であり、また今後のMIStの成長戦略もいづらか意識しましてテーマを「To The Next Stage!」とさせていただきます。世話人会での石井先生による保存療法も視野に入れた今後の方向性の拡大、さらに国際MISt研究会の設立、ならびに特別講演でのKern Singh先生による日本MISt研究会への海外への発信の必要性を賜り、結果的にテーマに一致した研究会として終了できたのかと述懐しております。

さて初日は、恒例の本音会（症例検討会）を秋保温泉「佐勘」にて開催させていただきます。日頃の先生方の疲れも癒して頂けるようゆったりしたお宿をご用意させていただきます。本音会に先立ち、世話人会も開催され、ここでは特に今後のMISt研究会の方向性の拡大が石井賢代表より提唱され、世話人会でも賛同が得られました。

続く本音会では、最初に中西一夫先生によるOpening Lectureとして「転移性脊椎腫瘍に対するMIStは放射線治療に変わりうるか」というタイトルでご講演頂きました。その後、石井代表によるSingh先生ご夫妻の紹介と乾杯から本音会の幕が切って落とされました。まさに学閥を超えた絆の深まるアットホームな宴会となりましたが、症例検討会も7題（1題欠演）と多くの演題を頂き、活発なディスカッションが繰り広げられました。倉を使った独特な雰囲気での2次会にも宴会から引き続き多くの先生にご参加頂き、まさに浴衣姿で本音で語り合い、遅くまで盛り上がり、MISt研究会の真髄をここで感じて頂けたのかと思われました。またSingh先生が日本酒好きであることも判明しました。

翌日は、秋保温泉から江陽グランドホテルへのバス移動という強行軍となりましたが、これも温泉と協賛、さらに先生方が研究会としての出張旅費の支給

を受けるための苦肉の策でした。今後もこれらの課題を網羅した会の運営の必要性を実感しました。

本会ですが、演題募集期間の延長により49題という多数の演題登録を頂きましたことから、発表形式には大分苦慮しましたが、一部の先生に前日の症例検討会へ差し替えをお願いし、さらにあらかじめ頂いた抄録から、メイン会場25題(Award候補)、第2会場17題の2会場制でご口演を頂くことにしました。今後ますます増えることが予想される演題数にどう対応していくのかは重要な課題と思われました。

またこれまでの一般演題に加え、シンポジウム「MISt 骨粗鬆症への挑戦」を企画させて頂きました。あらかじめ指定した課題を盛り込みながら、それぞれの骨粗鬆症症例に対する術式を5名のシンポジストに発表頂き、斎藤貴徳先生、星野雅洋先生にコーディネートして頂きました。脊椎外科医にとっての大きなハードルである骨粗鬆症にもMIStの可能性を実感できるシンポジウムであったと思われます。

特別講演として、石井賢先生による「最小侵襲脊椎安定術(MISt)：次のステージへ向かって“MISt procedures: To the next stage”」と、Kern Singh先生による「MIS Spine Surgery: The American Perspective. Past, Present and Future」の2つの講演を頂きました。いずれもこれからのMIStの方向性に大きく触れるご講演であり、多くの刺激を頂きました。

閉会式では、Best Paper Award、Best Encourage Award、Best Presentation Award、Best Discusser Awardの各表彰も執り行われ、来年会長の篠原光先生にもご挨拶を頂きまして、最後に恒例の記念撮影で無事に会を終了致しました。

最後に、多々至らぬ点もあったかと存じますが、東北のメンバーも含め、皆様のお陰で会を終了できましたことに感謝申し上げます。「MISt」という特異な組織の良さを再認識させられた会でした。ますますのMIStの繁栄を祈りつつ報告書の最後と致します。



第7回日本Mist研究会（第6回東北MISt研究会合同開催） 会長 富田 卓